

近代スピリチズムとロシア

— アレクサンドル二世の「コックリさん」 —

大 矢 温

はじめに

言うまでもなく思想史の課題は、教義や理論といった高度に抽象化され体系化された「上層」の思想を分析するにとどまるものではない。それは、「上層」のみならず、生活実感や無意識の感情といった「下層」の思想、つまり「上層」の思想の基底部になるようなそんな思想、に至るまで、その時代の重層的な思想を分析して過去の思想状況を再構築することにある。

ところが、日本におけるロシア思想史研究を振り返ってみると、もっぱら理論や教義、政治綱領などの分析といった「上層」の思想を対象にしたものが圧倒的多数で、「下層」の思想を対象としたものは数えるほどしかないのが現状である。政治思想史の分野に限ってみても、政治理論や綱領の分析が主流で、生活感覚や雰囲気、気分、といったレベルの分析はほとんどされてこなかった。神秘主義やオカルト思想の分野においても研究状況はこれと同じで、教義や思想体系の分析がほとんどであり、体系化されない思想はほとんど顧みられることがなかった。

本論は、従来ロシア思想史研究において顧みられることの無かった体系化されない「下層」の思想として降霊術の流行に注目し、日本における代表的な降霊術である「コックリさん」とアレクサンドル二世とのつながりをたどりつつ、19世紀の近代化、という文脈の中でロシアにおける降霊術を位置づけてみたい。

1. 明治日本と「コックリさん」

死別した親しい人ともう一度話がしたい、あるいは、これらか起こることを予知したい、といった人間の基本的な願望に根ざしているためであろうか、降霊術の歴史は、人類の歴史とともに太古へとさかのぼることができる。日本においても、神代の時代から降霊術の伝統がある。古事記の中に天照大神のシャーマンの性格を指摘することは容易だし、邪馬台国の卑弥呼が「鬼道に事え、能く衆を惑わす」と魏志倭人伝に記されたのは3世紀の末のことであった。今日でも恐山のイタコによる「口寄せ」がそのような降霊術の一つとして知られている。

本稿でまず対象にする「コックリさん」も現代の日本社会に広く浸透した降霊による占術の一種である。

「コックリさん」とは、「コックリさん」と呼ばれる憑依霊（通常狐の霊と考えられる）を呼び出して、託宣を仰ぐ占術の一種である。占い方には様々なバリエーションがあるが、通常は「いろは」五十一文字や数字、「諾」「否」などの文字を記した文字盤を用意し、その上で、三人の人間が三脚状に束ねられた割り箸や竹の棒の上に杯や古銭をのせ、これを支えて精神集中し、憑依を待つ。「コックリさん」が憑依すると、割り箸が自動的に動き出し、質問に答えて文字を示す、というものである。多様なバリエーションにもかかわらず、最後は鳥居の印を指して「お帰り」いただく、というのが共通した決まり事のようなのだ。割り箸や杯といった純日本的な道具立て、稻荷信仰を連想させる「狐の霊」と、コックリさんは一見、日本古来の降霊術のように思われる。

しかしながら実際、コックリさんの歴史はそれほど長いものではない。明治の「妖怪博士」井上円了は、明治20年初版の『妖怪玄談』において、「そのはじめて起こりし地は豆州にして、その地よりコックリの報道を得たるは一昨年にあり」と明治10年代後半伊豆発生説を展開する。

一昨昨年ごろのこととかや、アメリカの帆走船、豆州下田近傍に来たりて破損したることあり。その破船の件に関して、アメリカ人中久しくその地に滞在せしものありて、この法を同地の人民に伝えたりという⁽¹⁾。

つまり、明治17・8年に伊豆下田で難破したアメリカ船の船員で、その後下田に引き続き留まった者が「コックリさん」をもたらした、というのだ。また、「コックリさん」という名前の由来についても、井上円了は、次のように説明している。

そのとき、アメリカ人は英語をもってその名を呼びたるも、その地のものの英語を解せずして、その名の呼び難きをもって、コックリの名を与えたるなり。けだし、コックリとはコックリと傾くを義として、竹の上に載せたる蓋のコックリと傾くより起こるという⁽²⁾。

つまり、コックリさんはその伝来当時、別の英語の名前を持っていたのだが、下田の人々には難しすぎる名前だったので「コックリさん」と新しい名前を付けた、というわけである。コックリさんは、別の名前を持つアメリカ由来の「法」で、明治17・8年頃伊豆下田に伝来した、というわけである。

実際、当時の新聞にはコックリさんの流行を伝える記事が見られる。たとえば明治19年の朝日新聞は、京都室町で「神下ろし」を行ったとして松田与三郎なる人物が科料に処せられた事件と並んで、コックリさんの流行を次のように伝えている。

…またこの頃同地にてかの狐狗狸が大流行にて、新京極辺には、狐狗狸伝授所という看板を掲げたる方も出来、また所々にこれに用ゆる三本の竹を売る家も多く出来しが、蛸薬師の寺町南へ下ル七宝堂は、その効用を版木に彫り印刷して売り出したるを、下京警察にてはこれを取り押さえられ、狐狗狸竹を売り捌きたる噺家の松助を始め七名の者も、また同署にて当時

取調中なりという⁽³⁾。

関西での流行は、時を移さず東京にも伝播している。その年の暮れには東京での流行が報道されている。

先頃京阪地方にて、何者の猾奴が思いつきしにや、狐狗狸と称する者しきりに流行し、将来の事または隠微の事までも明言し、一としての的中せざるはなしと囃し立て、往々愚民を惑わし不都合の事もありし由なるが、いつかこの妄説の早くも東京に伝わり来たり、昨今諸所に於いて流行する由⁽⁴⁾。

大流行したとはいえ、報道から見る限り、伝来当初からコックリさんは信仰と言うよりは、多少いかがわしさの漂う「遊び」として受け入れられた事がうかがえる。新聞も「この妄説」と決めつけるなど手厳しい。京都の警察もまた、コックリさんが「まやかし」であることを前提に、松田与三郎を科料に処したり噺家の松助を拘留したはずだ。あるいは噺家の松助にとって、コックリさんは「しゃれ」の一種だったのかもしれない。井上円了の『妖怪妖談』執筆動機も、コックリが「児女輩の遊戯同様のもの」であるはずにもかかわらず、これを真に受けた人々の間に有害な影響を引き起こしている事態を憂慮して、このような「愚民の惑い」を解くことにあった⁽⁵⁾。

換言すれば、井上円了の目的は、コックリさんという非合理（彼の言葉によれば「妖怪」）を合理的な考察の対象とする事にあった⁽⁶⁾。そのため井上は、各地のコックリさん現象を収集している⁽⁷⁾。井上が収集したコックリさんの事例は多様である。ただし、それらに共通するのは、コックリさんが盆の回転や傾き、あるいは足の上げ下ろしによって質問に答えている点である。ところが、ここで留意すべきは、井上の事例には今日のコックリさんのように、コックリさんが文字を指し示すという事例が一例もないのである。今日我々が知るように、コックリさんが文字を指し示すようになるのは、井上の時代よりも後の時

代、という事になりそうである。

ともあれ、「コックリさん」とは、明治10年代後半にアメリカから伝来した「占い遊び」である、と言えそうだ。では、本家アメリカにおける「コックリさん」とは何だったのか、換言すれば、コックリさんの原型は何か。

この問題について上述の井上円了は、西洋の「テーブル・ターニング」である、と断定している。

…西洋に従来、テーブル・ターニングと称するものあり。この語、テーブルの回転を義として、その法、コックリ様と毫も異なることなし⁽⁸⁾。

さらにつづけて、井上円了は、次のようにテーブル・ターニングがコックリさんとして伝来した様子を推理する。

下田に來たりしアメリカ人は、かつてその本国にありしときこの法を知りたるものにして、その下田にあるの際、手元に適宜のテーブルなきゆえ、臨時の思い付きにて、竹と蓋とをもってこれに代用したるならんと想像せらるるなり。しかして、そのアメリカ人はこの法を呼んでテーブル・ターニングとかいいて伝えたるも、その土地の者、洋語に慣れざるをもって、コックリの語を代用するに至りしなりと思わるるなり。ゆえに余は、コックリすなわちテーブル・ターニングと同一なりと信ず⁽⁹⁾。

このように井上円了は、コックリさんの原型をテーブル・ターニングに求めたのだった。テーブル・ターニングとは、19世紀後半に流行した降霊術で、霊の力でテーブルが回転し、質問に対する答えを指し示す、というものである。下田に漂着したアメリカ人が、当時流行していたテーブル・ターニングを試みようとしたが、テーブルがなかったために、手近な竹を結び合わせてその上に飯櫃の蓋を載せてテーブルの代用にした、他方、現地下田の住人は、竹竿と飯櫃の「テーブル・ターニング」を「コックリさん」として受け継いだ、という

解釈である。

井上円了が提唱したこの「コックリさん＝テーブル・ターニング」説を下敷きに、今日では、日本のコックリさんは、テーブル・ターニングから発展したウィジャ・ボード (ouija board)、あるいはプランシェット (planchette) が明治 10 年代後半に日本に輸入され、それに日本伝統の憑物信仰がドッキングしたもの、と考えるのが通説となっている⁽¹⁰⁾。

2. テーブル・ターニングとスピリチズム

…テーブルの周囲に数人相集まり、おのおの手を出だして軽くテーブルに触れ、暫時にしてその回転を見るに至るなり。また、テーブルに向かって種々のことを問答することあり⁽¹¹⁾。

井上円了が描く「テーブル・ターニング」の様子である。コックリさんと「同一なりと信ず」と井上が看破したテーブル・ターニングも、憑依によってテーブルが自動的に回転し始め、問いかけに応じて回転を止めたり、あるいは床をノックする事によってこれに答える、というものである。

テーブルによって霊界と交信する事ができる、という「発見」が事実とされたのは、19 世紀中頃に欧米社会を席卷した、スピリチズムの流行の中での事である。事の起こりは、1948 年 3 月のある日、ニューヨーク州ウェイン郡ハイズヴィルに住むフォックス家の二人の姉妹、ケイト (1844-92) とマーガレット (1838-93) が寝室で不思議な叩音 (ラップ音) を聞いた事に始まる。姉妹は、答えが “Yes” なら 1 回、“No” なら 2 回、といった具合に霊と取り決めをして霊と交信する方法を発明した。このように叩音によって霊界と交信することができるが発見されると、たちまちのうちに何百人もの人がこの現象を体験しようとハイズヴィルに集まり、全米中の評判となったという。多くの人がフォックス姉妹の事件に触発されて霊界との交信を試みた。そのうちの何人かは、実際に霊界との交信に成功し、霊媒としての自分の潜在能力を発見したの

だった。かくして一年後にはニューヨーク州だけでも 100 人以上、全米では 1 万人以上の霊能力者が発見されたという⁽¹²⁾。「近代スピリチズム」の誕生である⁽¹³⁾。また、霊はこのような霊能力者を仲介してこの世と交信すると考えられたので、このような霊能力者は「霊媒」(medium) と呼ばれた。

このようにして「発見」された霊媒たちは、それぞれ独自の方法で霊界と交信するようになる。上述のテーブル・ターニングもその一種である。やがてテーブルの回転や叩音では複雑な内容を伝える事が出来ないため、「プランシェット」や「ダイヤル・プレート」、あるいは「ウィジャー・ボード」といった、交信のための特別な器具が使用されるようになる⁽¹⁴⁾。

「プランシェット」とは、二本の足と一本の鉛筆、計三本の足を持つハート形をした小さな板で、複数の人間がこの板の上に軽く指を置いて神経集中する事によって、霊の力によって自動筆記が始まる、というものである。この器具を使用する事によって(もちろん成功した場合に限られるが)、テーブルの回転や叩音によって交信するよりも遙かに複雑な内容が、素早く伝達する事が出来るようになった。プランシェットの発明によって、霊界との交信は特別な技能を要しない、しかもトランス状態になる事すら不要な、手軽な「室内遊び」となった。なにしろ、霊が自分で文章を綴ってくれるのだ。実際、数社のおもちゃメーカーがプランシェットを製造販売し、1880 年代には全米中で大流行したという⁽¹⁵⁾。しかしながら、このプランシェットにも、霊界からのメッセージが非常に読みにくい、時には判読不能である、という欠点があった。

「ダイヤル・プレート」は、プランシェットのこの不便を解消する装置だった。これはあらかじめ文字や数字を記した円板を回転させ、指示棒によって単語をつづるものだった。ただし、この「ダイヤル・プレート」は、装置が大がかりで高価だったため、プランシェットのように大衆的な人気を獲得するには至らなかった⁽¹⁶⁾。さらにプランシェットとダイヤル・プレートの両者を改良したのが、「ウィジャー・ボード」である。これは、二列に並べられたアルファベットと数字、上部に“YES”と“NO”、そして下部に“GOOD BYE”と記された板の上を、三本の足と指示用の角を備えた小板を動かして、文章をつづるもの

で、メリーランド州ボルティモアの E.J. ボンド (Elijah J. Bond) という人物が 1890 年に発明したものである⁽¹⁷⁾。

一見してこれが現在我々になじみのあるコックリさんと瓜二つである事がわかる。特に板の下部に書かれた “GOOD BYE” は、コックリさんに「お帰り」願うときの鳥居に相当する。ところが、すでに指摘したように、明治 10 年代後半に井上円了がコックリさんの調査を行ったときには、台の上には文字も、鳥居もなかった。他方、ウィジャー・ボードの発明は 1890 年、つまり明治 23 年である。上述の井上の調査より後の事なのだ。

ここから考えられるのは、次のような仮説である。つまり、まず明治 10 年代後半に、テーブル・ターニングの段階の降霊術が日本に輸入された。テーブル・ターニングは日本においては形を変え、コックリさんとして定着した。ところが、本場のアメリカでは、テーブル・ターニングはさらに進化して 1890 年 (明治 23 年) 頃ウィジャー・ボードになった。このウィジャー・ボードの流行を再び取り入れて日本のコックリさんもまた、進化した。したがって今日我々の知るコックリさんは、ウィジャー・ボードと瓜二つである。つまり、コックリさんは難破船の漂着といった偶然で単発的な文化の輸入ではなく、本家との継続的な接触のもと、本家の降霊術の進化に呼応して進化してきた、と考えるのが妥当だろう。ただし、いつごろから日本のコックリさんが文字を指し示すようになったかは今のところ不明である。

3. スピリチズムのスーパースター

アメリカで発生した近代スピリチズムは、様々な器具の発明によって一面では大衆化し、室内遊戯として発達していった。他方、それとは別に、霊媒たち、特にプロの霊媒たちは、個人芸として霊界との新たな交流方法を発展させていった。明らかな偽物は排される一方、評判の霊媒のもとには、多くの人々が押し寄せ、さながら現在「スーパースター」に人々が殺到するのに似た状況だったという⁽¹⁸⁾。このようなスピリチズムの流行は、アメリカからヨーロッパに伝

播し、まもなくロシアにも波及した。ドストエフスキーやソロヴィヨフがスピリチズムに熱中した事もよく知られた事実だし、トルストイの作品にも降霊術がたびたび登場する。たとえば戯曲『文明の果実』は降霊術を題材にしたものだし、小説『アンナ・カレーリナ』では、アンナとカレーリンの離婚を阻止するランドーという名の霊媒が登場している⁽¹⁹⁾。スピリチズムや霊媒は今日より遙かに大きな関心を、当時の社会で集めていたのだ。

そのような「スーパースター」霊媒の一人が、本論で対象にするダニエル・ダグラス・ヒュームである⁽²⁰⁾。

ヒュームは1933年にスコットランドのエディンバラ近郊の町カレーの貧しい労働者の家庭に生まれた⁽²¹⁾。1才になると彼はおばのメリー・クックに引き取られた。彼が9才の時、おばの一家は彼を連れてアメリカに渡り、コネチカット州ノーリッジに移住した。おばの一家とのそこでの生活は、22才になったヒュームがおばの家を追い出されるまで続く。追い出された原因は、彼の身边で頻発する心霊現象だったといわれる。おそらくヒュームもまた、フォックス姉妹の事件に触発されて霊との交信を試みた多くの人々の一人だったに違いない。当時の多くの霊能力者と同様、彼もまた、そこで霊媒としての自らの能力に目覚めたのだった。1855年、ヒュームは降霊術に興味を持つスポンサーを得て英国に渡る。プロの霊媒としてのデビューである。すでに降霊術の熱狂はアメリカからヨーロッパへと伝播していたときである。ヒュームの降霊会（séance と呼ばれた）はたちまち評判となった。

ヒュームの降霊会は、他の霊媒によるものと違ういくつかの特徴を備えていた。まず、ほかの多くの霊媒とは異なって、彼は金銭を受け取らなかった（とはいえ、宝石などのプレゼントは受け取った）⁽²²⁾。このこと一点でも無私で真剣な霊媒を十二分に演出したが、それに加えて、降霊会で見せる彼の能力も群を抜いていた。ヒュームは単にテーブルによって霊界と交信するだけではなく、彼の降霊会においては、テーブルが回転するのみならず空中に浮上したり、アコーディオンが自動的に演奏を始めたり、空中に「霊の手」が出現したと言われている。さらにヒューム自身の身体が8インチ以上伸びたり、彼が燃えさか

る石炭を素手でつかんで耐火性を示したこともあった。挙げ句の果ては、彼自身が空中に浮遊した例さえも記録されている⁽²³⁾。今では明らかにトリックと思われる、これらの現象も、当時は霊の力として信じられた。他方、彼は彼に疑いや反感を持つ人を、「霊が嫌うから」という口実で降霊会の現場から排除した。おそらくこれによって彼は、トリックが露見することを防いだのかもしれない。

このようにロンドンからイタリア、フランス、そしてロシアとヨーロッパ各地を転々としながら彼は王侯貴族や金持ちの家で降霊会を繰り返し、それによってアメリカ出身の貧しい青年は、ヨーロッパの上流社会の一員となったのだった。たとえば彼は 1857 年にはナポレオン三世の前で降霊会を行いナポレオン・ボナパルトの霊を呼び出している。そこではナポレオン・ボナパルトの手が出現して、サインしたという⁽²⁴⁾。また彼は、翌 1858 年 8 月にはロシアの將軍の娘と結婚し、アレクサンドル二世の祝福を受けている。

62 年にこの最初の妻アレクサンドラと死別し、ふたたび無一文となったヒュームは彫刻家として身を立てようと、ローマに移住する。ところがここでの生活も長く続かなかった。彼は法王政府から「魔術師」の故に国外に追放されてしまったのだ。友人の紹介で英国の『スピリチュアル・アテナイウム』誌に職を得た後も、降霊会で裕福な未亡人をだまして大金を得たとして訴えられるなど、スキャンダルがつきまとうようになる⁽²⁵⁾。

ヒュームの苦境を救ったのは、ロシアでスピリチズム擁護の論陣を張る H. A. アクサーコフだった⁽²⁶⁾。1871 年、ヒュームはこの H. A. アクサーコフのめい、ユーリヤ (Julie de Gloumeline) と再婚し、霊媒からの引退を表明した。アクサーコフ家の富によって経済的に安定した彼が、露見の危険を犯してまでも降霊会を続ける必要性はもはや無かったのである⁽²⁷⁾。彼が結核によって亡くなったのはそれから 15 年後のことだった⁽²⁸⁾。

4. ヒュームとロシア皇室

1858 年 3 月、スーパースター霊媒のヒュームがアレクサンドル二世の宮殿に

姿を現した。降霊会を催すためである。アレクサンドル二世の宮殿に現れたヒュームについては、皇后マリア付き女官のアンナ・チュッチェヴァがその日記に記録している。アンナは詩人 Ф. И. チュッチェフの娘で、アレクサンドル二世が皇太子だった 1853 年に皇太子一家の養育官に任命されて以来、1866 年にイヴァン・アクサーコフと結婚するまで、13 年間にわたって皇帝一家に仕えている。その間、部分的ではあるが彼女の日記が残されており、宮廷内部の出来事や雰囲気を知る貴重な資料となっている。

3 月 10 日、「テーブル回しのヒューム」が到着し、大宮殿で皇帝の家族を含む 12 人の立ち会いで降霊会が行われた。「魔術師」によって出現した「霊」は、部屋中で叩音を発し、その音で質問に答えたという。ただし、アンナに対しては「常に悪意を抱き」彼女を「隣の部屋へ追放した」。仕方なく、アンナは別室から「テーブルが床から半アルシンの高さに上がる様子」を「聞いた」のだった。このとき А. П. Бобринский 伯爵も別室に追放されたのだが、すぐに彼は誤解を解かれて立ち会うことを許された⁽²⁹⁾。

すでに述べたように、ヒュームは自分に対して疑いや悪意を抱く人間が降霊会に立ち会うことを認めなかったので、アンナの場合も、ヒュームを「魔術師」呼ばわりするなど、ヒュームの目にアンナが好意的でないと写ったものと思われる。とはいえ、皇帝一家は大いに気に入った様子で、宮廷では繰り返し降霊会が催され、それに「陛下はひどく熱中した」という⁽³⁰⁾。他方、当のアンナはヒュームのスピリチズムを霊の力というよりは「悪魔たちがそこでふざけているのだと信じて疑わなかった」⁽³¹⁾。ヒューム自身が神や宗教の話題によって降霊会をもっともらしく演出したにもかかわらず、アンナはそれを信じなかったようだ。

アンナの記述を見る限り、この降霊会でヒュームが見せた霊能力は、叩音による交信とテーブルの回転および浮遊、そして「霊の手」の出現だった。

次にヒュームが「その回転するテーブルと叩く霊とともに」宮廷に現れたのは、その年の 11 月のことだった。またしても数回にわたって降霊会が催されたが、前回とは違い、今回はこの「超自然現象」を信じないものもあらわれて、

宮廷内で論争が起こった。外相ゴルチャコフ公爵が「健全な悲観主義」を示す一方、ボプリンスキー伯爵は、「彼自身があの世からやってきた者にとられかねないほど」スピリチズムに熱中した⁽³²⁾。そのためか、11月2日の降霊会では、「霊がボプリンスキー伯爵の足をつかみ、座っている椅子もろとも回転させた」。さすがにこれにはアンナも「霊にしてはあまりにもはしなない」と感じ、「空虚な質問に対する空虚な回答はすべて、肉体から解放された霊にはちっとも似つかわしくないように思われるのです」⁽³³⁾と疑い出す。キリスト教徒として死後の世界を信じるアンナにとって、降霊会は厳粛な場でなければならなかった。それにもかかわらず、宮廷内におけるヒュームの降霊会は、あまりにも娯楽的な要素が強かったのだ。「私たちの世界よりもっと真剣なものを想像したいのですが、そこから帰ってきたものたちは、とても腕白なのです」。アンナは繰り返し日記の中で主張している⁽³⁴⁾。降霊会にあらわれた霊は、アンナにとっては、死者の霊というよりは、より原始的な霊に思えたのだ。また、アンナはそこに「超自然的なもの」があることも認めながらも、霊と交信することを「罪」とも感じており、キリスト教信仰の立場からヒュームの降霊会を疑っているのだ。とはいえ、アンナは自分の好奇心を抑えることができずに、疑念と好奇心の板挟みで悩むことになる⁽³⁵⁾。

11月5日にはアレクサンドル二世のもとで降霊会が催された。今回もアンナは臨席を許されずに、皇帝夫妻から降霊会の模様を聞いている⁽³⁶⁾。ただし、皇后は降霊会に興味を失っており、理由をつけて欠席していた。もっぱらスピリチズムに熱中していたのは皇帝アレクサンドル二世の方だったようだ。ともあれ、アンナの日記によれば、降霊会ではまたしてもテーブルが浮遊し、叩音が聞こえ、霊は叩音でロシア国歌のリズムをとったという。交信のために3回の叩音が「ダー」、1回が「ニェット」、さらにアルファベットが必要な場合には5回ノックすることが決められた。やがてニコライ一世らの霊が呼び出されると、質問の内容が難しくなってきたためか、アレクサンドル二世自ら、鉛筆で文字を指さし、該当する文字のところでニコライの霊がノックする、という方法に切り替えられた。アレクサンドルは霊の返答を待ちきれないでウィジャ・

ボードのような方法を考案して、それによって交信の効率化を図ったのだ。また彼は、アンナに「透明で光る指」を見たと言語など、すっかりスピリチズムにのめり込んでいたようだ⁽³⁷⁾。他方アンナは、何のために霊がこのようなくだらない質問に答えたり出席者に触れたりしに現れるのか、と疑問を呈し、ヒュームのスピリチズムに「不思議なくだらなさとは何か超自然的なものとの混合」を感じている⁽³⁸⁾。

ただし、アンナはヒュームを偽物と決めつけていたわけではない。たとえば降霊会のあったその夜、長いことねじを巻いていなかった猿の人形時計が突然演奏を始める、という不可解な事件が起こると、アンナはこれを「彼の霊」のせいだと考えている⁽³⁹⁾。他方、宮廷内ではこれらの現象を「マグネチズムの力」によって説明するものも現れだした。「マグネチズム」とは、1780年代にフランスで大流行した「動物磁気」の理論である。メスメルというオーストリア出身の学者が提唱したものだが、これは動物の体内には磁気が流れており、動物の病気はこの磁気の流れが乱れることから起こる、とするものである。メスメルは自分の磁気を患者に注入することによって病気を治療することができる、と主張し、他方、（特に女性の）患者の方は、容易に暗示にかかった。一種の心理療法なのだが、当時の心理学は催眠術を科学的に説明するレベルには達していなかった。マグネチズムが催眠術へと進化するのは1880年代のことである。そこに至るまで、マグネチズムは不可視の世界と交信する手段として神秘主義に接近したのだった⁽⁴⁰⁾。

ロシアにおいても、1830年代に当時のローマン主義的雰囲気背景にマグネチズムは大いに流行したという⁽⁴¹⁾。したがって1830年代の神秘主義の流行を経験したものの目には、スピリチズムは新種のマグネチズムと写ったのかもしれない。

ほどなく皇帝の周囲でもスピリチズムを霊の力ではなく、マグネチズムと解釈するものが現れるようになった⁽⁴²⁾。このような雰囲気を察してか、ヒュームはボ布林スキー伯爵に手紙を書き、新年まで降霊会を行えない旨を一方的に宣言し、そして沈黙した⁽⁴³⁾。

1859年の新年がやってきた。新年早々1月4日にヒュームの降霊会が皇帝の部屋の向かいで催された。今回はアンナも臨席を許されたため、日記にも降霊会の様子が具体的に記されている。今回もまた、皇后は降霊会に興味を示さず、欠席している。降霊会ではまず、テーブルが「十分な高さまで」浮上し、左右に動揺した。その際、アンナはテーブルの上の鉛筆などが元の位置から動かず、ランプの炎も揺らがなかったことを観察している。その後、例によって叩音による交信が始まったが、アンナは霊に対して「トゥィ」で呼びかけたために「『トゥィ』と語ることができるのは神に対してだけだ」と霊にたしなめられている⁽⁴⁴⁾。その後、アコーディオンが「見えない手によって」演奏を始め、アンナは何者かに膝を掴まれている。今回もテーブルの動きと叩音、そして「手」の出現が降霊会の出し物だった。初めて降霊会に出席したアンナは、降霊会が催されている最中に常に冷たい空気を手足に感じたという。そのためアンナは好奇心にもかかわらず、寒さと眠さと戦い続けたのだった。

実際に降霊会に立ち会い、降霊現象を体験したにもかかわらず、アンナはこれを「マグネチズムの現象なのか、それとも超自然現象なのか」決めかねている⁽⁴⁵⁾。とはいえ、今回の降霊会でアンナの疑念はいっそう強固なものとなったようだ。アンナは、霊が「単に月並みなことを言ったり平凡な指摘をすることばかり」で「将来についてや、霊の世界についてや、あの世の生活や、神秘的なことについて」決して語らないことに不満を漏らし、降霊会での霊との交信を「もっともくだらない仮面舞踏会の会話」と断じている。とはいえ、降霊会は彼女にとって不快なものではなかったようだ。「わたしはむしろ、ふざけたり笑ったりしたい気分となり」霊の手に「触れられると、思わず叫び声を挙げてしまった」⁽⁴⁶⁾。アンナにとっても、おそらく宮中の多くの者にとっても、ヒュームの降霊会は「罪のない」「ひまつぶし」⁽⁴⁷⁾にすぎなかったようである。

5. ロシア皇室と世論

このようにアレクサンドル二世の宮中では、1850年代末に皇帝を中心にスピ

リチズムが流行していた。皇帝アレクサンドル二世自身やコンスタンチン大公のほかにも、「熱狂的な解放論者の一人」⁽⁴⁸⁾で後に71年から交通通信大臣になるボ布林スキー伯爵がスピリチズムに熱中したのをはじめ、70年から宮内大臣のアドレルベルク伯爵、65年から郵便電信大臣のトルストイ伯爵、外務大臣のゴルチャコフ公爵⁽⁴⁹⁾、さらには沿バルト地方県知事将軍のスヴォーロフ伯爵、61年に第三部長官となる保守主義者のシュヴァーロフ伯爵、61年にスヴォーロフ伯爵の後任で沿バルト地方県知事将軍となり63年からは国家評議会の構成員ともなるリヴェン男爵など、そうそうたるメンバーが、なかには夫人を同伴して、ヒュームの降霊会に参加している⁽⁵⁰⁾。屈辱的なクリミア戦争の敗戦から復興し、農奴改革を含む一連の大改革が目前に迫ったこの時期に、皇帝をはじめとする顯官がコックリさんもどきの「ひまつぶし」にうつつを抜かしていたことになる。

このような事態を、当時のロシア世論はどのように評価していたのだろうか。まず、スピリチズム自体の真偽について、世論はどのように見ていたのかを見てみたい。

アメリカのフォックス姉妹の事件を契機に大流行した近代スピリチズムは、降霊会という「場」と、叩音をはじめとする物理的な「現象」を特徴とする点で従来のシャーマンや幽霊妖怪のたぐいとは区別して考える必要がある。限定した「場」で、具体的な「現象」を伴うことで、スピリチズム科学の対象になりうるのだ。スピリチズムが流行する中で、これを科学的に分析しようとする努力がなされたのも当然のことであった。たとえば1882年にイギリスで英国心靈研究協会（Society for Psychical Research: SPR）が「通常‘心靈的なもの’あるいは‘超常的なもの’と呼ばれるものに対して、偏見無く、科学的な方法でそれに対する理解を促進する」ことを目的に設立されている⁽⁵¹⁾。とはいえ、否定する確固たる証拠がないうちはその可能性を否定しない、というのが科学の態度であるから、個々の事例については「偽物」の判定が下ったものの、科学の面からスピリチズムの心靈現象を全般的に否定することはできなかった。

ロシアにおいても、1870年代に原子の周期律表の発見で有名な、Д. И. Мен

デレーエフの発案でペテルブルク大学付属の物理学協会にスピリチズムの現象を調査する委員会が設立された。調査の対象になった現象は、「テーブル回転、叩音による不可視の存在との会話、霊媒による人間の形の呼出し」など、当時の降霊会でよく見られた現象である。ロシアにおけるスピリチズムの熱心な唱道者であった H. A. アクサーコフらもこの委員会に協力してスピリチズムに関する資料を提供するのみならず、イギリスから霊媒を呼び寄せて実験に供した。スピリチズムを賛否両面から、科学的に調査しようとしたのであった。ところが、アクサーコフによって 1875 年にイギリスから招聘された霊媒ペッチ兄弟は委員会による 6 回にわたる降霊会の調査のすえ、「ペテン師」と認定されてしまった。次にイギリスからアクサーコフが招聘した霊媒クライヤは、「偽物」との明白な証拠はつかまらなかったが、委員会が下した結論は、「スピリチズムは迷信である」というものだった⁽⁵²⁾。1876 年のことである⁽⁵³⁾。

しかしながら、個々の「偽物」を暴いたところで、これがスピリチズム全般、霊界の存在を否定することになるのだろうか、そしてスピリチズムを「信じた」と願う人々の心を納得させることができるであろうか。当時スピリチズムに注目していたドストエフスキーが提示した問である。『作家の日記』において彼は、メンデレーエフの心靈現象調査会の報告を読んだ後の「失望」を 2 回にわたって開陳している。当初スピリチズムに新たな可能性を期待していたにもかかわらず、後にスピリチズムに失望し、スピリチズムを「実に並はずれた、とてつもない、しかも愚劣きわまる心の迷いであり、でたらめな教義であり、無知の産物である」⁽⁵⁴⁾と否定的にとらえるようになったドストエフスキーの、今度は委員会に向けられた「失望」は、委員会が「一般的な事実として」スピリチズムを否定できなかった点にあったのだ。「ミセス・クライヤ一人だけを相手にしたのは、一般的な事実として、テーブルの応答について」「結論は引き出せなかったはずである」⁽⁵⁵⁾。

この委員会がスピリチズムを「迷信」と断じるよりも遙かに早く、ヒュームの熱狂がさめやらぬ 1860 年に、断固としてこの降霊会を偽物と断じたのは、チェルヌィシェフスキーであった。評論『哲学における人間学的原理』におい

て彼は、ヒュームを「単なる手品師であって、実際、将来を知ること、彼に語られなかった秘密を知ることにはできないし、彼の眼前にない本や書類を読むこともできない」と結論している⁽⁵⁶⁾。ただし、その根拠はいささか「状況証拠」的である。曰く、「もし彼が未来を知ることができるのなら、彼はどこかの宮廷で外交顧問にされ」るだろうし⁽⁵⁷⁾、「もし彼が彼の眼前にない本を読むことができるのなら、政府と学会は、古代の手稿を搜索するために学者を東方に派遣せずに、彼に依頼するだろう。そして彼はパリから今日我々が知らない古代ギリシャの作者の作品を読んで朗読するだろう」⁽⁵⁸⁾。ところがヒュームは外交顧問にもなっていないし、学者にもなっていない、そのほうが「手品師より遙かに儲けになり、名誉であるにもかかわらず」である。つまり彼は「信じやすい人々が」彼に付与しているような「能力を持たない」のだ⁽⁵⁹⁾。このように、チェルヌィシェフスキーの結論は、断定的ではあるが、客観的な根拠に乏しいものであった。

科学的なアプローチによっては、スピリチズムの現象を完全に否定することはできなかったわけである。一方でスピリチズムは、来世の存在、霊の不滅、といった点でキリスト教とも接点を持つ。まさにこの点に、フーリエやスウェーデンボルグ、そしてスピリチズムに注目したドストエフスキーの関心があったのだ⁽⁶⁰⁾。

この点は、ソロヴィヨフの場合も同じである。留学時代にソロヴィヨフは、「全力を要求される脇目の許されぬ重要な仕事」としてロンドンでスピリチズムに没頭していた⁽⁶¹⁾。それが「宗教に客観的な根拠」を提示するものと信じて。そして、ドストエフスキーと同様に失望し、否定的な結論に達する。彼にとって、「霊の出現」などの、現にスピリチズムが与えるものは、「まず第一に客観的と言うには不十分なもの」であり、「第二に内的な宗教的な意義を欠いて」いたのだ⁽⁶²⁾。

このように、スピリチズムは、その真偽を巡ってロシア社会に大きな波紋を投げかけた。他方、皇室がスピリチズムに熱中している、という事実に対しては、世論はこれを大きな問題とは見なさなかったようだ。これはおそらく、た

たとえば後のニコライ二世の宮中におけるラスプーチンのような影響力を、アレクサンドル二世宮中にヒュームが持っていなかったためかもしれない。どこまでもスピリチズムはコックリさんもどきの「ひまつぶし」にすぎなかったのだ。

数少ない例外が、国外で自由出版活動を展開していたゲルツェンであった。1865年11月1日付けの『鐘』でゲルツェンは、「我が国のペテルブルクでスピリチズムが繁栄し、陛下がヒュームと会談し、ヒュームは陛下を一旦落涙に至らしめたことは本当か」と宮中のスピリチズムを問題にしている⁽⁶³⁾。とはいえ、ゲルツェン自身、この問題を引き続き真剣に取り扱おうとはしていない。せいぜい、自分が47年当時住んでいたパリの通りに皇帝が宿泊した、という「神秘的な一致」を「ヒュームに相談しよう」と別の評論において茶化している程度である⁽⁶⁴⁾。

むすび

19世紀の中庸に、ほぼ時を同じくして近代国家への道を歩み始めた日本とロシアという二つの国の社会において、コックリさんやスピリチズムの演じた役割はとても「近代化」と呼べる代物ではなかった。

すでに見たように、スピリチズムに興じるアレクサンドル二世の宮中には、クリミア戦争の敗戦処理や一連の改革を間近に控えたロシア支配層、といった真剣で切迫した印象はない。高位高官によるスピリチズムへの熱中もまた、開明官僚による近代的改革の遂行、といった合理性とは無縁である。脳天気でしかも非合理的な、罪のない無邪気さが感じられるのみである。

日本におけるコックリさんの地位はさらに惨めである。伝来当初からコックリさんは、不思議な動きはするものの、託宣という機能に関しては全く真面目にとられていなかった。せいぜいが狐か狸の仕業、というのが大方の見方だった。狐狗狸竹を売ったとして拘留された噺家松助にしても、コックリさんを活用して自ら株や投機に手を出すこともなく、コックリさん用の道具を売っていたところを見ると、彼自身、あまり真剣にコックリさんの予言能力を「信仰」

していたとは思えない。

当然のことで、コックリさんにしてもスピリチズムにしても、その場の人が知らないことは何一つ語らない、いや語れないのだ。アンナが指摘し、ドストエフスキーやソロヴィヨフが一様に失望した点である。

では、コックリさんやスピリチズムは近代とは無縁の存在だったか、というと、決してそうではなかった。まず、コックリさんやスピリチズムを合理的に説明しようとした井上円了やメンデレーエフの態度は、間違いなく近代的な精神に貫かれていた。

しかし、ここで指摘したいのは、コックリさんやスピリチズムもまた、日本やロシアにとっては「近代」だったのではないか、という点である。

言うまでもなく、日本やロシアが近代国家への道を歩み始めたとき、日本やロシアの指導部が西欧社会から「近代国家」という出来合のモデルを捜し出してきて、それを純粋な形で日本やロシアへ輸入した、というわけでは、決していない。憲法や近代的行政システム、そして近代的な思惟様式、といった、理想化された形での「近代」を象徴する歴史的成果は、いわば「近代」というメダルの表側である。しかし、現実の「近代」というメダルは表側だけで存在したのではない。本論で対象にしたコックリさんやスピリチズムは、「近代」というメダルのいわば裏側である。日本やロシアが近代化に向けて足を踏み出したとき、玉石混淆の「近代」という大波が、表裏合わせて、これらの国におしよせたのだった。

憲法をはじめとする近代国家の枠組みが出来つつある日本と、大改革前夜のロシア、という二つの社会は、一面では幽霊妖怪が跋扈し憑き物が横行したり、あるいは神秘主義に没入するなど、近代合理主義とは別の様式で世界を認識していた社会でもある。換言すれば、このような意識の基底層の上に輸入品としての近代が接合された、ともいえよう。

スピリチズムに限らず、近代化過程における近代の裏面、という問題は、19世紀のロシア思想を研究する上で重要な点である。これは単にロシア神秘主義や宗教思想との関わりで重要である、というだけではなく、ロシアの近代化の

性格を再検討する意味でも意義深いもののはずだ。本論では近代化の問題は、要点を指摘するに留まったが、稿を改めて論じるべきテーマだと思う。

注

- 1) 井上円了、『妖怪玄談』、井上円了・妖怪学全集第四巻、柏書房、2000 年所収、34 頁。
- 2) 井上、同書、35 頁。
- 3) 「神下ろしと狐狗狸の勾引」、朝日新聞明治 19 年 7 月 16 日、『明治ニュース辞典』、毎日コミュニケーションズ、1984 年、第 3 巻、230 頁所収。
- 4) 「京阪から東京へ、コックリさん流行」、時事新報（東京）明治 19 年 11 月 1 日、『明治ニュース辞典』、第 3 巻、779 頁所収。
- 5) 井上、同書、20～21 頁。
- 6) 井上、同書、16 頁。
- 7) 井上、同書、22～30 頁。
- 8) 井上、同書、35 頁。
- 9) 井上、同書、36 頁。
- 10) コックリさんの由来については、井上説を根拠に一柳廣孝はターニング・テーブル説を、荒俣宏はさらに憑き物信仰の影響を指摘している。一柳、『くこっくりさん』と『千里眼』、講談社選書メチエ、1994 年、22～23 頁、および荒俣宏、「こっくり」項、平凡社世界大百科事典、参照。ウィジャ・ボード、およびプランシエットについては、“Museum of Talking Boards”, 19/VIII 2002, <<http://www.museumoftalkingboards.com/index.html>> 参照。ただし、両者とも初期のテーブル・ターニング段階のコックリさんから現在のウィジャ・ボード段階のコックリさんへの変遷については触れていない。
- 11) 井上、同書、35 頁。
- 12) Trevor H. Hall, “The Enigma of Daniel Home”, Prometheus Books,

New York, 1984, pp. 28-29. 稲垣直樹『ヴィクトル・ユゴーと降霊術』、水声社、1993 年、77 頁。

- 13) 日本では英語圏の用法にならって、単に霊の存在と霊界との交信の可能性を説くものを「スピリチュアリズム」、さらに狭義に、霊の再受肉を説くものを「スピリティズム」と区別するが、本稿ではロシアの用法にならって、霊界との交信を説くものを「スピリチズム」と広義に呼ぶ。一柳、前掲書、45-47 頁。См. В. С. Соловьев, “Спиритизм”, Энциклопедический словарь, Брокгаус и Ефрон.
- 14) OED によれば、プランシェットは 1855 年頃フランスで発明されたとされている。Cf. “Planchette”, OED
- 15) Cf, The National Society of Paranormal Phenomenon, “History of the Ouija”, 29/VIII 2002, <<http://www.angelfire.com/la/paranormal-phenomenon/ouijahistory.html>>.
- 16) Cf, Museum of Talking Boards, “History of the Talking Board”, 29/VIII 2002, <<http://www.museumoftalkingboards.com/history.html>>.
- 17) 特許が受理されたのは 1891 年 2 月の事だった。このときの申請書類は、合衆国特許事務所のウェブサイト上のアルヒーフで見ることができる。図 1 参照。US Patent No. 446054, “United States Patent and Trademark Office Home Page”, 19/VIII 2002, <<http://www.uspto.gov/>>.
- 18) Gordon Stein, “The Sorcerer of Kings”, Prometheus Books, New York, 1993, p. 14.
- 19) 中村健之介、『知られざるドストエフスキー』、第 8 章、岩波書店、1993 年。御子柴道夫、『ソロヴィヨフとその時代』ソロヴィヨフ著作集別巻 1、刀水書房、1982 年、114-120 頁。『文明の果実』、トルストイ、中村白葉訳、河出書房新社、トルストイ全集 12、第 22 景、『アンナ・カレーリナ（下）』、トルストイ、中村融訳、第 7 編 22 章、岩波文庫、1989 年、352 頁参照。ロシア文学に対するスピリチズムの影響に関しては、久野康彦「スピリチュアリズム・神智学と 19 世紀末～20 世紀初頭のロシア文学」、日本ロシア文

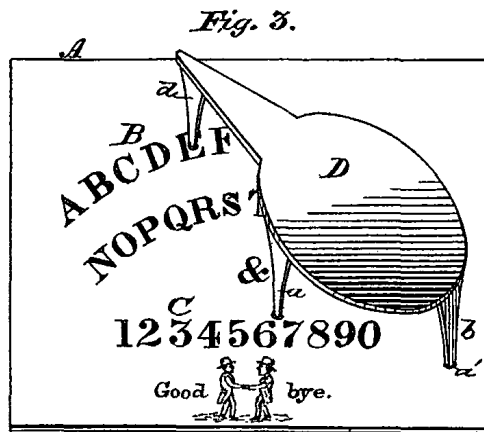
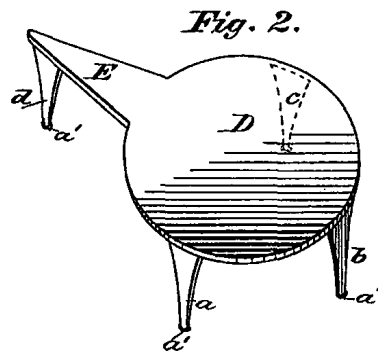
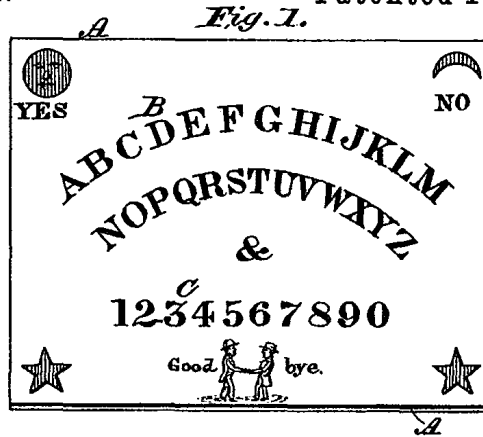
CULTURE AND LANGUAGE, No. 57

(No Model.)

E. J. BOND.
TOY OR GAME.

No. 446,054.

Patented Feb. 10, 1891.



Witnesses:
Frank A. Bingham
H. R. Waller

Inventor:
Elijah J. Bond,
By J. C. Brecht,
Attorney.

THE MORRIS PETERS CO., PHOTO-LITHO., WASHINGTON, D. C.

図 1 ウィジャー・ボード

学会第 51 回研究発表会、2001 年 9 月、於新潟大学、参照。

- 20) Daniel Dunglas Home : 彼自身は Home を Hume と発音していたため、ロシア語での表記は Юм となる。ゲルツェン全集の編集者がヒュームを英国の哲学者デビット・ヒュームと誤解しているのはそのためと思われる。
А. И. Герцен, собрание сочинений в тридцати томах, т. XVIII, с. 741.
- 21) ヒュームの伝記は彼の 2 番目の妻による伝記、およびステイン前掲書による。Home, Mme. Dunglas, “D. D. Home: His Life and Mission”, 1888, reprint ARNO PRESS, New York, 1976. Cf. Gordon Stein, pp. 71-74.
- 22) Hall, “The Enigma of Daniel Home”, p. 47.
- 23) Stein, “The Sorcerer of Kings”, pp. 77-85.
- 24) Mme Home, p. 77.
- 25) Stein, pp. 72-73. この事件は、ロシアでも報道されている。См. “Голос”, 26/IV, 1868г.
- 26) Александр Николаевич Аксаков (1832-1903). 作家のセルゲイ・アクサーコフのおいになる。主にニジェゴロド県で官吏を務めるが、モスクワ大学医学部を聴講したり、翻訳家として活動するなど、勤務以外の分野でも活動する。特にスピリチズムの紹介、普及においてめざましい活躍をする。ソロヴィヨフがイギリス留学中にスピリチズムに没頭した際も、彼の手引きをしている。御子柴道夫、『ソロヴィヨフとその時代』、118-120 頁参照。“Спиритизм и наука”, СПб. 1872, “Анимизм и спиритизм”, СПб. 1899 などの単著のほかにも雑誌 *ребус* に一連の論文を発表している。См. “Указатель некоторых статей Ребуса за 20-ть лет”, *ребус*, 4-го марта 1901г., № 1000.
- 27) 1871 年にイギリスを訪れたスピリチズムの本家、ケイト・フォックスはすでに靈魂を「完全物質化」full form materializations させていたという。
Cf. Hall, “The Enigma of Daniel Home”, p. 142.
- 28) Hall, p. 143.

- 29) Анна Чютчева, “Воспоминания”, Москва, Захаров, 2000: Текст печатается по двухтомному изданию: А. Ф. Тютчева, “При дворе двух императоров”, Москва, 1928-29, с. 284.
- 30) Тютчева, с. 286.
- 31) Там же, с. 284.
- 32) Там же, с. 313.
- 33) Там же, с. 309.
- 34) Там же, с. 309, с. 312.
- 35) Там же, с. 309, с. 310.
- 36) Там же, с. 311.
- 37) Там же.
- 38) Там же.
- 39) Там же, с. 312.
- 40) 一柳廣孝、『くこっくりさん』とく千里眼』、48～56 頁。メスメリズムについては、ヴィンセント・ブラネリ著、井村宏次・中村薫子訳『ウィーンから来た魔術師』、春秋社、1992 年、およびジャン・チュイリエ著、高橋純・高橋百代訳『眠りの魔術師メスマー』、工作社、1992 年参照。
- 41) 1830 年代のロシアにおけるメスメリズムの流行に関しては、越野剛「ロシア文学とメスメリズム」、『ロシア語ロシア文学研究』、日本ロシア文学会、1999 年、第 31 号参照。
- 42) Тютчева, с. 314.
- 43) Там же.
- 44) Там же, с. 322. ただし、何語で語られたかは不明。
- 45) Там же, с. 323.
- 46) Там же, сс. 323-324.
- 47) Там же, с. 324.
- 48) Там же, с. 296.
- 49) Там же, с. 311.

- 50) Там же, с. 322.
- 51) Society for Psychical Research, “About us”, 29/VIII 2002, <<http://moebius.psy.ed.ac.uk/~spr/about.html/>>.
- 52) См. В. С. Соловьев, “Спиритизм”, Энциклопедический словарь, Брокгаус и Ефрон. なお、この委員会に関しては、科学史の面からの研究があるらしい。Richard E Rice, “Mendeleev as a Public Opponent of Spiritualism”, History of Science Society, “1996 Annual Meeting Program”, 29/VIII 2002, <<http://www.hssonline.org/meeting/program/archiveprogs/program1996.html/>>. ただし、内容は未見。アメリカ科学史学会によるこのセッションに関する言及は、梶雅範、『メンデレーエフの周期律発見』、北海道大学図書刊行会、1997 年、359 頁参照。
- 53) ドストエフスキーもこの委員会の調査に注目しており、『作家の日記』で再三、この話題を取り上げている。ドストエフスキー、『作家の日記』1876 年 3 月・4 月、ドストエフスキー全集 12、小沼文彦訳、筑摩書房、昭和 51 年、参照。
- 54) ドストエフスキー、『作家の日記』、334 頁。
- 55) ドストエフスキー、『作家の日記』335 頁
- 56) Н. Г. Чернышевский, собрание сочинений в пяти томах, т. 4, с. 224.
- 57) Чернышевский, сс. 224-225
- 58) Там же, с. 225.
- 59) Там же, с. 225.
- 60) ドストエフスキーとスウェーデンボルグ、フーリエに関しては、中村健之介『知られざるドストエフスキー』第 8 章参照。
- 61) 御子柴道夫『ソロヴィヨフとその時代』、118 頁参照。
- 62) В. С. Соловьев, Письмо к А. Н. Аксакову от 27 / IV 1883, Собрание сочинений В. С. Соловьева, фототипическое издание, изд. “Жизнь с Богом”, 1970, письма и приложение, т. II, с. 279.

- 63) А. И. Герцен, “Спиритизм в Петербурге”, Собрание сочинений в тридцати томах, т. XVIII, с. 432.
- 64) Герцен, “Августейшие путешественники”, там же, т. XIX, с. 281.